

「我が人生思い残すことなし」第3章

きたごう はると
作：北郷 遥斗

※ 前回までのあらすじ = 昭男の通夜に出席していた雄大とはるか、今の自分達の生活では考えられないような当時の様子に驚きを隠せない二人。そして今まで知る事の無かった日本に対する昭男の強い思いを感じ、改めて雄大とはるかは昭男の事をもっと知りたい。そう感じていた =

(尚、ホームページでもこれまでのストーリーを見る事が出来ます。 www.kyodo-keiei.co.jp)

4. 結婚

「おばあさんお願いします」はるかがすぐに振り返って美子の方を見て言った。「いやや〜。はるかに頼まれると嫌言われへんやん。ちょっと恥かしいけどな」「ほんならどっから話しようか」「出会いから」はるかがはにかみながら言った。「はるか、お前顔赤いよ」雄大がからかった。「ふん。お兄ちゃんなんてきらい」「まあ、まあ二人ともその辺で。じゃ出会いの話な。それはな、私が住み込みで働いてた駅前の簡易旅館の修繕におじいさんが働きに来やはったんが最初やねん」「私も田舎の中学出てすぐ働きに来た年やった。私のお父さんは私が生まれてすぐに戦争で死なはったし、私は顔知らへんねん。お母さんも、働きに出た大阪で空襲に会って死なはった。戦争が終わった時5歳やった私はお兄さん、お姉さんに育てられ、中学まで出してもうた。その一番お世話になったお姉さんも中学の卒業式の前、結核で死なはった。それからお兄さんは東京に働きに出はって、家には誰も居んようになってしもた。だから私はとにかく早く結婚して家族というものが欲しかった。そんな時におじいさんが現れて、お茶とか余り物のお菓子なんか分けてあげてる内に仲ようになって1年ぐらいして結婚したんや」「おじいさんってどんな人やった?」「そやな、頑固やったけど



気の細かい所もあって優しくったで」と、美子のはるかに教えた。「お前何回か会ってる人だし、それぐらい分かるやろ」雄大がたしなめた。「聞いただけもん」はるかが返した。「また、始まった。仲ええのか悪いのか分からへんな」「悪いです」今度は二人声を合わせて言った。と同時に回りが一斉に笑いで噴き出したので沈んだ空気が一変して和んだ。「やっぱり、気合うねんな」美子が笑いをこらえて納得した。「それで?なあ、続きも話して」はるかがたまらずせかせかせたので、美子は気を取り直した。「はい、はい。でも結婚言うても何も無い時代やから身内だけのひっそりしたもんやったけどな。あの時代はみんなそんなもんやった。ただ一つ珍しかったのはその頃もうお腹に赤ちゃんが居て、あんたらのお父さんな。今で言う『でき婚』とかいうやつな。その時に話したらみんなびっくりしたはったわ。今やったらどうっていう事ないわな。ほんま時代は変わったもんや」「へーそうなの?知らなかった」はるかは目を丸くした。